

ようやく暑さも過ぎて朝夕の涼しさに秋の気配を感じるようになってまいりました。例年、秋はスポーツに、様々な芸術にと活動的になる季節です。しかし、今年はコロナ禍という課題を抱えながらの日々を送らなければなりません。今、心身共に疲れを覚えておられる方が多いことと思います。このような時、誰でも慰めと励ましを必要としていることと思います。特にクリスチャンにとっては神様からの励ましと慰めを必要としています。ではどこで神様の慰めと励ましを得るのでしょうか？ コリント第二 7:6 に「気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。」とあるようにパウロは神様の慰めは人を通じて来ると語っています。その意味において教会つまり主にある兄弟姉妹のつながりは神様の慰めと励ましを体験できる場です。今日の聖書箇所から神様が私たちを励まして下さっていることを理解し、私たちもまた教会の交わりを通して主の励ましを覚えるためになすべきことを考えたいと思います。

まずヘブル 10:22 に「そのようなわけで」と語られていますが「どのようなわけ」なのでしょう。それは、「主イエスが天に昇り、父なる神の右で、あわれみ深い大祭司として、私たちのために、とりなしていただく」ということです。執り成すとは私のために神様が祈ってくださるということだけではありません。旧約において大祭司と呼ばれる人が律法の規定に沿って動物を捧げ、式を執り行います。今日の前の箇所詳しく記されていますが人の罪が赦され、神の前に聖い者とされるためには大祭司の大変な労力がそこかけられます。主イエスは今も天において大祭司として働き、自ら十字架の上で神の小羊として血を流され、死なれたことによって私の罪を赦し続けてくださっているのです。それは一重に神様の私への愛の故にです。これが神の励ましの根拠となっています。私は大学生時代は東京で生活しました。ある意味、東京は刺激と誘惑の多い町ですが親が仕送りをしてくれました。そんなに生活に余裕のない中から仕送りしてくれている親のことを思うとそれが大きな励ましになりましたし、恥ずかしいことは出来ないという歯止めにもなりました。クリスチャンにとって今も主イエスが天において私を愛して、執り成し続けて下さっているということは大きな励ましとなるのではないのでしょうか？

聖書は、主イエスが執り成してくださるがゆえに、「神に近づこうではありませんか。」「希望を告白しようではありませんか。」「注意し合おうではありませんか。」「いっしょに集まろうではありませんか。」という四つの励ましを私たちに与えています。

第一の励ましは、22 節です。「私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」と勧められています。「心に血の注ぎを受け、からだをきよい水で洗われた。」というのは、主イエスの十字架を信じる信仰とバプテスマ（洗礼）を意味しています。私たちは主イエスの十字架の血によって罪の赦しばかりでなく、罪からのきよめをもいただきました。地上では罪を犯さない人はいませんから、罪の赦しと、罪からのきよめは、特別な時だけでなく、日ごとに必要です。「全き信仰をもって、真心から神に近く」というのは、何の罪もない完全を言っているわけではありません。「全き信仰」というのは、「私に必要なのは罪の赦しであり、罪からのきよめです。主イエスによってしか、私の罪の赦しはなく、きよめもありません。」と信じ、罪を悔い改めて、神に近づく信仰のことです。「真心から」というのも、同じような意味です。大きな手術をする時、他の医者から「セカンド・オピニオン」を聞くことがあります。しかし、たましいの医者であるイエスにいやされようとする時には、「セカンド・オピニオン」はいらないし、求めるべきではないのです。ただ主イエスだけに聞き、主イエスだけに任せる。それが「真心から」という意

味です。聖書は「神に近づきなさい。そうすれば神はあなたがたに近づいてくださいます。」(ヤコブ 4:8) と言って、真剣に神に近づくことを求めています。恐る恐るではなく、またいろいろと検討しながらでもなく純粋に主イエスに従いたいと願わされます。求められているのは「全き信仰」です

第二の励ましは、23 節です。「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」ここで言われている「希望」とは、主イエスの再臨のことです。主イエスが天に昇られたのは、そこから、もう一度この地上においてになって、救いを完成してくださるためです。イエス・キリストが十字架で死なれ、復活し、再び来られる、これは、聖書の教える信仰の中心です。テサロニケ第一 1:9-10 は「あなたがたは偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになった。」と言っています。ピリピ 3:20 にも「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」とあります。有名な聖句ですが国籍が天国にあるということを楽しむだけでなく、主が私たちのところに来て下さることが大きな励ましとなっているのです。なぜなら主イエスの再臨の希望があるからこそ、私たちの今生きている人生も意味を持つからです。どんな人生の矛盾も疑問に思えることも神はすべてご存知で、そこに意味と答えを与えてくださるのです。そしてこの希望、つまり、キリストの十字架と復活と再臨を人々に伝えることが、伝道であり、あかしです。ペテロ第一 3:15 は「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」と教えていますが、あなたの心にはキリストの十字架があるでしょうか。復活のキリストがおられるでしょうか。キリストの再臨の希望に心が燃えているでしょうか。私たちのうちにある希望を人々に分かち与えることができる者にさせていただきたいと思います。クリスチャンは希望に生きる者なのです。

第三の励ましは、24 節です。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。」これは、クリスチャンのまじわりについての励ましです。クリスチャンのまじわりは、たんなる「お付き合い」や「助け合い」ではなく、それによってお互いが霊的、信仰的に成長していくまじわりです。テサロニケ第一 5:14-15 も「兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」と教えています。このみことばに励まされ、キリストが私たちに求めておられるまじわりをつくりあげていきたいと願わされます。クリスチャンは愛を表わす者なのです。

第四の励ましは、25 節です。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」とあります。聖書で「いっしょに集まる」というのは、常に、礼拝や聖餐のために集まることを意味しています。趣味の会や同好会なら、都合が悪くなってそこから遠ざかるということはあるでしょう。しかし、天におられる神と、その右に座しておられるイエス・キリストを礼拝する礼拝から遠ざかるということはあってはならないことだと思います。そんなことを言うところの箇所は今のコロナ禍にあっては適切でないと思われる方がいるかもしれません。「一緒に集まりたくても集まれないのだからしょうがないではないか」と。

最近のことですが WHO(世界保健機構)がソーシャルディスタンスということばよりもフィジカルディ

スタンスの方が適切な言葉だと言われ始めています。ソーシャルディスタンスとは社会的に距離を置くことであり、フィジカルディスタンスとは物理的な距離という意味です。社会的距離の社会とは2人以上の人間関係に置き換えられます。ですから感染しないために距離を置くと言われているのはあくまでも物理的距離を取ることであり、社会的距離ではないということです。ですから物理的に距離を置く置かないということは実は本質的な問題ではないのです。そうではありませんか？ 遠方にいてあまり顔を合わせない者であっても心の親密さを持つことはできます。主イエスは大切な戒めは「心を尽くして神様を愛すること」と「心を尽くして隣人を愛すること」この2つであるとおっしゃいました。今、私たちは隣人を愛するがゆえに距離を置いて、集まらないように心がけています。ですから「集まる愛」もあれば「集まらない愛」もあるのです。基本は主イエスが今も私たちを愛してくださり、執り成してくださるということなのです。

ここまで読んでみますと「信仰」「希望」「愛」ということばが励ましのキーワードとなっていることにきがつかされます。「全き信仰をもって神に近づくこと」「しっかりと希望を告白すること」「互いに勧め合っ
て愛と善行を促すこと」これらの励ましは、単なる勧めのことばではありません。これは、このことばに従うなら、その通りのことが実現するという約束のことばでもあるのです。なぜ、そう言うことができるのでしょうか。それは、主イエスが天に昇り、父なる神の右に座し、そこから私たちの弱さを思いやり、私たちに力を注いでくださるからです。天におられる主イエスを仰ぐなら、私たちは、この励ましを実行していくことができるのです。